博士（文学）　小　坂　みゆき

学位論文題名

朝鮮族の民族誌的研究
－年中行事と人生儀礼における文化変化と移動－

学位論文内容の要旨

本論文は、中国東北地方に居住する朝鮮民族（以下、「朝鮮族」と記す）の人々の移動に着目し、そこに生じる、年中行事、人生儀礼のなかの文化変化の動態を明らかにすることを目的としている。そこから、維持されるもの、廃れるもの、形を変えて残るものを拾い出し、このような選択がなされるにあたり、何が影響しているかを検討し、民族固有の現象を超えた文化変化における要素選別のあり方、人間が他の存在や環境の変化に直面した際の適応のあり方について考察するものである。

分析の理論的枠組みとして、民俗学者である島村恭則が福岡市における在日朝鮮人を分析した際に用いた「生きる方法」を適用し、調査地である中国吉林省吉林市でのフィールドワークでは、経験的参与観察、ビデオ観察、個別聞き取り調査、集団聞き取り調査、質問票を使用した個別聞き取り調査、アンケート調査、資料・文献調査を実施した。

序章では、朝鮮族の現在置かれた状況を概観し、朝鮮族の文化変化を考える上では、朝鮮半島から中国東北部への移動から現在の出稼ぎに至るまで、「移動」との関わりから捉えていく必要があることを指摘し、本研究の目的を述べている。

第１章では、朝鮮族の文化変化研究を行うにあたり、これまでの研究がどのような理論的枠組みで行われてきたかを整理し、形成過程に特殊性のある朝鮮族の文化変化を分析する上での限界について検討した。その結果、島村恭則の「生きる方法」や煎本孝の民族性・帰属性の理論も併せて取り入れて、調査対象の分析を行うと述べている。

第２章においては、先行研究に対し、２つの視点から分析している。１つは、調査対象について、もう１つは調査テーマについてである。調査対象については、これまで朝鮮族研究が誰によって何を主題として行われてきたかを、中国での研究と日本での研究に分け、その変遷を探っている。テーマについては、移動と文化変化研究に関するものである。これには大きく分けると、朝鮮族形成期における朝鮮半島から中国東北部への移動とそれによる朝鮮族の文化形成についての研究と、近年の出稼ぎに代表される朝鮮族社会から他への移動とそれに伴う文化変化の研究があり、中国と日本における研究の現状について概観している。その上で、出稼ぎ者が急増し不在者のいる家庭が恒常的となっている現在の朝鮮族社会の文化変化に焦点を絞った研究が不足しているとし、それを補うものとしての本研究の意義を述べている。

第３章では、朝鮮半島から中国東北部への移動から始まる朝鮮族の歴史について時代順に述べ、中国政府による少数民族としての認知や文化大革命など、朝鮮族の文化形成や変化に大きく影響した事象について概観している。

第４章から第６章では、現地において実施した調査にもとづき、事例報告と分析を行っている。

第４章においては、現在の朝鮮族社会において、生活環境にもっとも大きな影響を与えている韓国への出稼ぎを取り上げ、出稼ぎ者が恒常的にいる朝鮮族社会の家庭の姿や家族の意識、出稼ぎに行くための準備、ビザの申請、出稼ぎに行く目的などを整理している。そして、出稼ぎは、移動のための手続や費用の問題から、家族に何かあっても簡単には帰国できず、長期間不在となるのが常であり、このことで家族関係がぎくしゃくするなど、人々の認識にも変化が見られることがわかった。また、出稼ぎ者に対する韓国社会の受け入れ方も必ずしも好意的ではなく、同じ民族であるはずの韓国人から不当な差別を受けて、裏切られた思いで帰国する人も少なくないという現状を明らかにしている。

第５章では、年中行事として、正月・小正月、端午節、中秋節の各行事について調査を行い、そのなかで、今なお維持されているものと、そうでないものが生じる事情について検討し、考察している。これらの行事のうち、正月については、出稼ぎ者が恒常的となっている朝鮮族の家庭事情を反映して、全員が揃うことは実現できないものの、それに代わってインターネットでの交流が盛んに行われること、大晦日から正月にかけての迷信、年配者や世話になった人への歳拝と呼ばれる挨拶回り、子どもが年長者へ行なう歳拝の習慣、五穀米やもち米、山菜などを食べることなどは維持されていることが明らかになった。しかし、祖先への茶礼や墓参りなどの習慣は見られないこと、漢族の食文化の習慣が導入されていることも明らかになった。特に、儒教が基本となる祖先に対しての習慣には、残されているものと、様相を変えたものの両方が存在していることがわかった。一方、その他の行事では、かなりの部分が変化していることがわかった。

第６章では、人生儀礼として、出産、百日祝、初誕生祝、還暦祝など誕生に関する儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼の３つを取り上げた。それぞれについて、儀礼を経験した者からの聞き取りやアンケート調査などをもとに、朝鮮族の人々の儀礼のなかにおいて今なお維持されているものとそうでないものが生じる事情について検討・考察を行っている。その結果、誕生に関する儀礼では、百日祝、初誕生祝、還暦祝の様子は外観すると大きな変化はなく、年々豪華になっていることがわかり、婚姻儀礼においては、生活環境の変化の影響もあり、2000 年代に入り、手順の簡素化が見られることがわかった。葬送儀礼では、文化大革命時代に宗教的習慣は徹底的に否定され、土地整備を理由に墓を壊され、先祖祭祀を禁じられるなど、自分たちの葬送儀礼の基本となるものを否定され失ってしまったという経験を有していて、更に埋葬方法が土葬から火葬に変化したという事情もあり、散骨が増え、葬送儀礼の手順も簡略化されていることがわかった。

第７章では、年中行事、人生儀礼における文化変化の様相から、その変化の要因について分析、考察し、①朝鮮半島からの移動、その後の離農、出稼ぎ者の増加など生活環境の変化、②文化大革命などによる民族的・宗教的習慣に対する国家の政策、③出稼ぎ者の急増による家族全員の儀礼への参加の困難さ、④農耕社会を維持する上で不可欠だった習慣が薄れたことと合理主義的思考の普及、⑤世代間の意識の相違、という５つの要因を抽出した。

終章においては、朝鮮族の移動と年中行事や人生儀礼における文化変化に関するデータを、島村恭則の「生きる方法」で解釈し、次のように整理している。まず、墓参りや祖先への祭祀は、文化大革命の時代に墓を破壊され、墓参を禁止されたことで行われなくなった。しかし、墓を持たず散骨を中心とした葬送儀礼に変化させ、自らの移動を容易とする状態を作り出している。また、お金を稼ぐための韓国への出稼ぎが、朝鮮族の家庭で近年大きな位置を占め、その妨げにならないかたちで年中行事、人生儀礼のあり方が変えられている。さらに、年中行事や人生儀礼における方法の選択では、朝鮮族の意識にいまなお残されている儒教の思想や習慣が影響するとともに、漢族との差異を意識し、漢族社会である中国の中で自らの位置を確認するための戦略をとっている、と結論づけている。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　佐々木　　亨
副　査　　教　授　　津　曲　敏　郎
副　査　　教　授　　白木沢　旭　児

学位論文題名

朝鮮族の民族誌的研究
－年中行事と人生儀礼における文化変化と移動－

中国東北地方に居住する朝鮮民族（以下、「朝鮮族」と記す）に関する文化人類学的研究は、従来、主に朝鮮半島にルーツを持つ研究者によって行われてきたが、小坂のような他者による研究は、特定の語りに特権を認めない「対話空間」を作ることを可能とした。また、これまでの研究では、従来の朝鮮族の文化が変化、崩壊してきているとの指摘は多いが、小坂のように、それがどのような事情によって変化を遂げたのか、実際に生活する人々にとってそれがどのような意味をもつのかという分析を試みたものは少ない。さらに、そこに「移動」という視点を持ちつつ、出稼ぎ者を出した家庭の側に焦点を絞った研究は少なく、この点が本論文の大きな特徴である。

また、延べ151日間に及ぶフィールドワークでは、経験的参与観察、ビデオ観察、個別聞き取り調査、集団聞き取り調査、質問票を使用した個別聞き取り調査、アンケート調査、資料・文献調査など、非常に多様な方法を用いて調査を進め、（1）出稼ぎ者が恒常的にいる朝鮮族社会の家庭の姿や家族の意識、出稼ぎに行くための準備、ビザの申請、出稼ぎに行く目的など移動に関する実態、（2）正月・小正月、端午節、中秋節の各年中行事の実態、および（3）出産・百日祝・初誕生祝・還暦祝など誕生に関する儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼の各人生儀礼の実態を、丁寧に把握することに努めた。特に、吉林市在住の家族と寝食を共にして家族の行動を記録し、非常に貴重な1次データを収集した点、または文化大革命の時代に墓が破壊されて以降、近年における松花江への散骨までの変化を、朝鮮族へのヒアリングから、彼らの心情とともに明らかにしている点は高く評価できる。

このようにして得た朝鮮族の移動と年中行事や人生儀礼における文化変化に関するデータを、本論文で用いた理論的枠組みである島村恭則の「生きる方法」により、中国において少数民族として暮らす朝鮮族の生活には、そこで生きていくための方法が常に模索されていることを明らかにした。例えば、墓参りや祖先への祭祀は、文化大革命の時代に墓を破壊され、墓参を禁止されたことで行われなくなった。しかし、墓を持たず散骨を中心とした葬送儀礼に変化させ、自らの移動を容易とする状態を作り出していること。また、お金を稼ぐための韓国への出稼ぎが、朝鮮族の家庭で近年大きな位置を占めているが、その妨げにならないかたちで年中行事、人生儀礼のあり方が変えられていること。さらに、年中行事や人生儀礼における方法の選択では、朝鮮族の意識にいまなお残されている儒教の思想や習慣が影響するとともに、漢族との差異を意識し、漢族社会である中国の中で自らの位置を確認するための戦略をとっている、と結論づけている。一見、受動的のように見えてもその中で能動的な選択がなされていると解釈し、いままでの研究ではわからなかった朝鮮族の姿を浮き彫りにすることに成功している。

一方で、朝鮮族の現状を記述する際に重要な要素と考えられる民族言語の使用状況、葬送儀礼を説明する際に朝鮮民族で重要とされる族譜に関する記述がともに不十分である点、また「生きる方法」とともに民族性・帰属性の理論も用いて朝鮮族の移動と文化変化を論じる設定であったが、十分に展開できなかった点などがあることは否めない。しかし、前者について小坂は知見を有しており、後者は出稼ぎ先の韓国で今後調査を実施することでより深く考察すべき課題であり、本論文の成果を損なうものではないと判断した。

以上の審査結果に基づき、本委員会は全員一致して、小坂みゆきに博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。